

三重の「ええもん」手作り体験

日々の暮らしに役立ち、ゆとりや彩りをもたらす品々を、私たちは親しみを込めて「ええもん」と呼びます。これら「ええもん」の多くは、受け継いだ伝統の技を磨き、さらに進化させようと努力する職人たちや、その魅力を発信しようとして活動する人たちによって生み出されています。

今回は、三重の「ええもん」作りを体験できる施設の中から6か所をご紹介します。時には一人で、時には家族や仲間を誘って、体験してみたいかがでしょう。

※手作り体験の内容・予約方法・人数・時間・料金などは、それぞれ異なりますので、事前に必ずご確認ください。

取材・文……中村真由美
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



「桑名の千羽鶴」折り鶴体験

「六華苑」

「桑名市桑名」

一枚の和紙から親子の連鶴が誕生
 東海道五十三次の宿場町、桑名藩の城下町としての面影を残す旧桑名宿界隈は、「七里の渡し跡」「九華公園」などの名所・旧跡が揃い、歴史散策が楽しめます。散策の途中、必ず立ち寄りたのが「六華苑」です。入口から続くアプローチを進むと、目の前に現れるのは、ため息が出るほど優美な洋館。設計者は、鹿鳴館を造ったことで知られる建築士・シヨサイア・コンドルです。洋館に接して和館が連なり、各部屋から見事な庭園を眺めることができます。ここは、桑名の実業家・2代目諸戸清六氏の邸宅として、大正時代に建てられました。

その価値の高さから、国の重要文化財に指定されている館内では、桑名が誇るもう一つの文化財を体験できます。「桑名の

千羽鶴」(市指定文化財)の折り鶴体験です。一般に千羽鶴といえば、1羽の鶴か、千羽の鶴を糸などでつないだものをいいますが、「桑名の千羽鶴」は1枚の紙から数羽の連続した鶴を折るという独特のもの。江戸時代に桑名の長円寺の住職・魯縞庵義道が考案しました。

「魯縞庵義道が考案した連鶴は49種類で、中には100羽近くの鶴を折り上げるものもあります。今日は2羽の連鶴の「餌拾」を折ってみましょう」と、この日の体験を指導してくれたのは、高木文子さん。「桑名の千羽鶴を広める会」の代表です。

同会の活動の幅は広く、スペインに赴き、子どもたちに教えたこともあったそう。すると、指導後に子どもたちが手をつないで、連鶴がつながっているこ



高木 文子さん

とを体で表現してくれたといえます。

折り鶴体験は、1枚の和紙に記された線に沿ってハサミを入



和紙の裏に記された図面通りに切る。

れることからスタートします。会の皆さんが震災の被災地に定期的に連鶴を贈っている話などを聞きながら切り終えると、大小の四角形が繋がった形になりました。次に、大きい方の正方形で鶴を折っていくのですが、小さな方が気になって、折りにくくなってきました。

「手に持ったまま折ってみて」と指導を受けると、スムーズにできるようです。つながっている部分は、わずか2ミリメートル



大きな四角形で親鶴を折っていく。



完成した連鶴「餌拾」

程度ですが、途中で切れる心配はほとんどありません。これが和紙を使う理由。体験では、機械で漉いた和紙を使用しますが、手漉き和紙であれば、さらに薄くても丈夫で、仕上がりがきれいだといわれました。

10分ほどで大きい方の鶴が完成。残りの鶴の方も約5分ででき、大小2羽の連鶴が完成です。その姿は、親鶴が抱った餌を子鶴に口移しで与えているように見えます。「餌拾」という名前に



「六華苑」内の「桑名の千羽鶴」展示風景



97羽の連鶴「百鶴(ひゃっかく)」 「六華苑」内に建つ洋館

も先人のセンスを感じます。2羽だけでなく、さらに多くの連鶴に挑戦したいという方は、「六華苑」で定期的な開講されている講座をおすすめします。「桑名の千羽鶴」の奥深さを実感することでしょう。

お問い合わせ

「六華苑(月曜日休苑)」
 TEL 0594・24・4466
 「桑名の千羽鶴を広める会」
 TEL 080・3627・7120
 (高木文子代表)



木の棒と木片がインテリアにもなる鍋敷きに変身

組子細工の木工体験

「指勘建具工芸」

「孤野町小島」

昨年5月に開かれた「主要国首脳会議（伊勢志摩サミット）」では、三重県が誇る名産品の数々が各首脳たちに贈られました。その中の一つが、組子細工の文箱です。組子とは、釘を使わずに木を組み付ける技術のこと。日本家屋の障子や欄間などで目にしたことがあるでしょう。

この組子細工を施した文箱を制作したのは「指勘建具工芸」です。昭和7（1932）年に創業して以来、卓越した技を磨き続け「全国建具作品展示会」などで数々の受賞歴を誇ります。

まちかど博物館（毎月第3土曜日開館）として、木工体験を受け付けていると伺い、予約してお邪魔すると、3代目で一級技能士の黒田 裕次さんが指導してくれました。この日体験するのは、鍋敷き作り。まず用意

してくれたのは、2種類の木の棒で、長さは17センチメートルと11センチメートルがあります。すでに斜めに複雑な形の溝が彫られており、指導通りにはめ込んでいくと、いつしか六角形の枠組みのような形になりました。これは「地組み」といい、組子の基本形だと教わります。

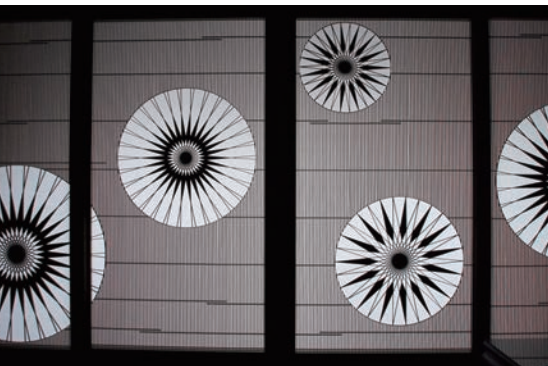
次の工程に入る前に、好きな柄を選ぶことができました。組子の柄の種類は数百以上に及ぶともいわれますが、5種類の中から「桜亀甲柄」を選択しました。小さな木片を「地組み」の中にはめていくのですが、簡単そうでも難しく、最後の方はグツと力を入れないと組み込めないまでに締まってきました。それでも、最後の一片をキュッとはめ込むと、およそ20分で完成。糸や紐などを付けて吊るせば、飾り物



「ミラノ万博」に出品された作品



「花火」

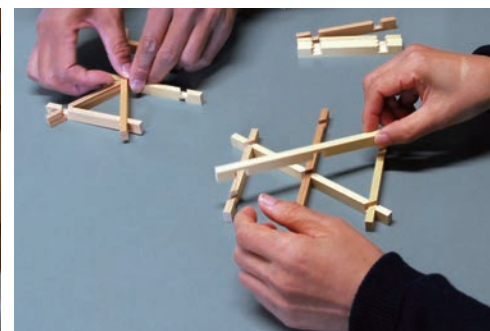


「光輪」

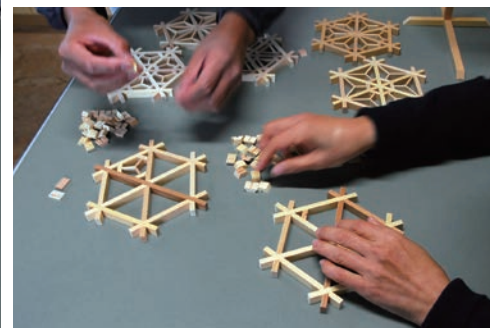
にもなると伺い、楽しみの幅が広がりました。

「指勘建具工芸」では、これまでに制作された建具の数々を間近に見ることも可能です。この日は、一昨年の「ミラノ万博」に出品し、話題となった作品を見ることもできました。これにはセンサーが内蔵されていて、近付くと輪の部分が歯車のように動く仕掛けになっていました。さらに目を奪われたのは、大輪の花火が夜空を彩る光景が表現された障子や、仏様の背後に輝く光を連想させる障子など。前者は「花火」、後者は「光輪」と命名されていますが、「花火」制作には、およそ10万個以上の木片が使われているといえます。一見、絵のように見える部分ですが、近づいて見ると、わずか15ミリメートル程度の木片の数々だと気付きます。その緻密な技には圧倒されます。四方を囲まれているうちに、大きな万華鏡の中

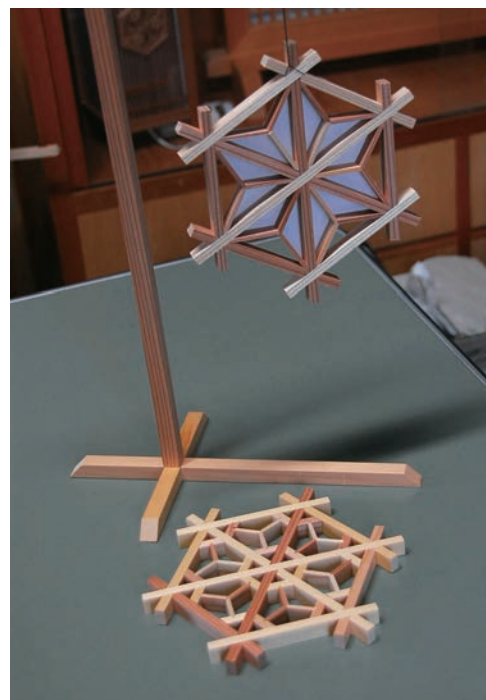
に入り込んだような不思議な感



2種類の長さの木の棒を組み立てる。



小さな木片を一つずつ組み込んでいく。



完成した鍋敷きと組子細工飾り

覚になりました。

こうした見事な細工の中でも「光輪」のように円を表現した意匠は、2代目の黒田 之男さんが新たに考案したもので「後光組」と命名されています。黒田さんは、ほかに「六方転」などのオリジナル意匠を編み出し、「現代の名工」にも選ばれています。その不断の努力と革新性で、今後も私たちに驚きと感動を届けてくれることでしょう。



黒田 裕次さん(左)と黒田 之男さん(右)

お問い合わせ

「指勘建具工芸」

TEL 0599・3966・1786

自分好みの鼻緒の下駄で町歩き 鼻緒のすげ替え体験

「なつかしの下駄屋博物館」

【津市久居（丁町）】

かつて、多くの日本人が履いていたもので、今再び脚光を浴びているものがあります。下駄です。ご存知のように二枚の歯のある台木に3つの穴を空け、鼻緒をすげた履物ですが、この鼻緒を指で挟んで踏ん張って歩くことで、足腰を鍛えるなどの効果があるともいわれます。

かつての久居城下の一角に昭和19（1944）年から店を構え



鈴木 郁子さん

「鈴友はきもの店は、まちかど博物館」なつかしの下駄屋博物館」として公開され、鼻緒のすげ替え体験が可能です。この日、体験を指導してくれたのは、下駄を履いた作務衣姿も様になるご主人の鈴木 郁子さん。鼻緒の先から伸びている紐を「くじり」と呼ばれる道具を使い、結んだり、ねじったり、輪の中をくぐらせたりしていきます。一つひとつの作業は単純ですが、繰り返していくうちに複雑になり、難しくなってきます。しかし、優しい指導のお

ます。一つひとつの作業は単純ですが、繰り返していくうちに複雑になり、難しくなってきます。しかし、優しい指導のお



左右の鼻緒の紐をぐるぐる巻きにする。「くじり」を使って鼻緒の紐を縛る。

鼻緒をすげ替えた桐の下駄



ちに教えることもありですが、この最後の工程には、子どもたちも大喜びだといえます。こうして自分の足に合わせた、自分好みの鼻緒をすげたことで、下駄を履いて歩く日が待ち通しくなりました。履かずにしまっておいた下駄に新しい鼻緒をすげ、町を歩いてみてはいかがでしょうか。

お問い合わせ

「なつかしの下駄屋博物館」

（火曜日休館）

TEL 0599・2555・671

形も柄も用途も自由にカゴ作り 「籐細工小物作り」

「籐商玉屋」

「伊勢のまちには、初孫が生まれたお祝いに、籐製の乳母車を贈る風習があるんですよ」。

宮町で籐製乳母車や籐家具などを扱う「籐商玉屋」を訪ねると、3代目主人の玉村 裕子さんが笑顔で出迎えてくれました。店内には、宝船などの豪華な意匠が施された籐製乳母車があり、その匠の技に驚かされます。籐



縁起のいい柄が立体的に編み込まれた籐製乳母車

縁起のいい柄が立体的に編み込まれた籐製乳母車を象ったバスケット類、家紋を編み込んだ額縁などもあり、籐で編めないものはないことを改めて知りました。同店は、まちかど博物館として一般公開され、予約すれば籐細工の小物作り体験ができます。地域の子どもたちにはコースター作りを指導することが多いそうですが、この日はミニカゴ



玉村 裕子さん

は、熱帯性の蔓性の植物で、丈夫で柔軟性があるのが特徴。店内には、座り心地がよいと評判の椅子に加えて、動物を象ったバスケット類、家紋を編み込んだ額縁などもあり、籐で編めないものはないことを改めて知りました。

作りに挑戦。初心者には難しい「根絞め」（円の中心部分）などは、この道41年の玉村さんが制作してくれるので安心。放射線状に伸びた籐の間をヒゴ状の籐で等間隔に編み込んでいくと、いつしか直径12センチメートル程度の円形になりました。ここからは側面を編み込んでいきますが、



カゴの底の部分を編んでいく。



側面の部分を編んでいく。

少しでも油断すると、模様がない規則に。単純な作業だからこそ集中しないといけないと改めて学びます。ある程度の高さになったら、色付きのものを編み込んでいきます。色の選択も、編み込む幅も自由。自分好みになれるのも、体験の醍醐味といえるでしょう。最後に仕上げの工程を経て、およそ2時間で完成です。少しゆがんでいるものの、納得の出来栄え。カゴに何を入れるか、あれこれ考えるのも、楽しいものです。



完成したミニカゴ

お問い合わせ

「籐商玉屋」（不定休）

TEL 0599・2866・235

伝統工芸品の「伊勢和紙」で心に残る置物作り 「千支の酉の置物」作り

「伊勢和紙館」

「伊勢市大世古」

私たちが「伊勢さん」と呼び親しむ伊勢神宮。折に触れてお参りする際には、御神札やお守りなどを求める方も多いことでしょう。この御神札やお守り、暦などに使用する和紙を、百年以上に渡って製造しているのが、大豊和紙工業株式会社です。

「神宮へ奉製する清浄な和紙を製造しているのは、全国でも唯一ここだけです」と教えてくれるのは、同社広報室の中北喜亮さん。お話からは、厳選した原料で一枚一枚を丹念に仕上げ、厳重な検査を経た和紙だからこそ、唯一認められているという



中北 喜亮さん

想いが伝わってきます。同社では、神宮御用紙に加えて、杉皮や海藻などを漉き込んだ手漉き工芸紙や、インクジェットプリンタ用和紙なども製造しています。前者は伊勢の風土ならではの表情と味わいがあり、後者は、独特の温かみと陰影のある画像がプリントできると、専門家からも好評を得ています。これらの「伊勢和紙」は、三重県指定伝統工芸品に認定されています。

「神宮御用紙製造場」と刻まれた石碑や、かつての御師・龍大夫の屋敷跡地に建つことを示す石碑なども見られる同社は、まちかど博物館として、見学も受け付けています。特に、毎月第2土曜日に「伊勢和紙館」で開催されるイベントでは、和紙の手漉き体験や和紙の凧やカレンダー



「伊勢和紙」にプリントされた風景は見ごたえ十分。



「御師龍大夫跡」と刻まれた石碑
「神宮御用紙製造場」を示す石碑



大正時代の風情が漂う「伊勢和紙館」

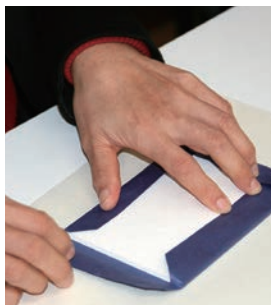
作りなど、毎回趣向を凝らした体験講座が行われ、人気を呼んでいます。

11月の体験内容は「千支の酉の置物作り」と伺い、参加することに。指導してくださるのは、取締役の中北ひろみさんと、同館スタッフの岡田直子さんです。市内外から応募した人の中には、毎年の参加を楽しみにしている人もいらっしやいます。皆さん



体験風景

と一緒に作業するため、終始和やかなムードです。最初に土台作り、そして屏風を作りますが、いずれも材料は、和紙。温もりのある和紙に触れているだけで贅沢な気分になります。この段階では、印通りに切つて、丁寧に糊付けすることを心がければ、それほど難しい作業ではありません。しかし、紙粘土で作られた2羽の酉に小さな目や、トサ



神宮林をイメージした写真がプリントされた和紙を使って屏風作り。貼る。台紙となる和紙を糊付けて



酉に小さな目をつける。

カを張り付ける段階になると、途端に難しくなりました。「なかなか難儀やなあ」の言葉も聞こえる中、スタッフの助けも得ながら、70分ほどかけて何とか完成。土台は神宮のお白砂、屏風は神宮林、そして2羽の酉は、神鶏をモチーフにしていることが分かりました。次々に「まあステキ」「かわいい」などと感じの聲があがります。できあ



参加者たちの作品

がった作品を見比べるのも、また楽しいひと時。最後に全員の商品で記念撮影をしました。同館では、本年も引き続き、月替わりで和紙を使ったイベントが開催されます。詳細については、事前にお問い合わせください。

お問い合わせ

「伊勢和紙館」(日・月曜日休館)
TEL 05996・28・2359

ヒノキのかんなくずが可憐な花へ

「ひのきシート」の「サージュ作り」

「ヒノキアート田原屋」

「尾鷲市中井町」

「尾鷲地域の人びとの生活は『林業とともに、生き抜いた』と、いつても過言ではない」『尾鷲市史』の一節通り、尾鷲市を含む東紀州は、古くから木材の大産地でした。中でもヒノキは、年輪が密で強度が高く、色つやもよいと、県を代表する優良材として知られます。柱などの建材としてだけでなく、テーブルや椅子などの家具類、まな板やカバンなど、あらゆる製品に加工できるヒノキですが、かんなくずだけは、一般には捨てられてしまします。しかし、これを美しい花に変身させた方がいます。ヒノキを活かした地域振興などに取り組み、特定非営利活動法人「海虹路」代表で、アートフラワー講師の池田比早子さんです。

「きっかけは、平成11年の『東



池田 比早子さん

紀州体験フェスタ』でしたね」。中井町にある、まちかど博物館「ヒノキアート田原屋」を訪ねると、ヒノキの香り漂う中、館長の池田さんが出迎えてくれました。お話によれば、同フェスタで来賓が胸に付けるリボンの代わりに、尾鷲らしいものをと考えたのが発端とのこと。普段からヒノキのかんなくずの利用法を模索していた池田さんなら

ではの発想で、試しにヤブツバ



ヒノキで作った行灯



まちかど博物館の看板



「ひのきシート」で作ったわし「へむへむ」



花嫁が持つブーケ



パリパリした「ひのきシート」に水をかける。



切り取った花びらに針金の芯を固定。



花びらを何枚も重ねていく。



完成したヤエツバキの花

キ(尾鷲市の花)の花のバッジを作ってみたところ、予想以上の出来栄で、評判となったのです。以来、かんなくずは「ひのきシート」と名付けられ、結婚式で花嫁が持つブーケなどのアート作品から、帽子・うちわ・タワシ・草履などの日用品にいたるまで、さまざまな作品が生まれています。現在では、地域の小・中学校の環境学習にも取り入れられています。

「ヒノキアート田原屋」では、間伐材を利用したマイ箸作りや「ひのきシート」を使ったコサージュ作り体験などが可能です。海外からの訪問客などには、マイ箸作りが人気とのことですが、今回はコサージュ作りに挑戦することに。まず、幅12センチメートル、長さ70センチメートルほどの「ひのきシート」に霧吹きで水をかけるところから始めます。すると、パリパリしていたシートのシワが伸び、しっとりして

きました。次に型紙に合わせて花びらの形に切り取り、針金の芯を固定する工程に入りますが、簡単そうできて、なかなか思い通りにいきません。「自然に逆らわずに、指をヒノキに合わせるつもりで」というアドバイスを受けながら、何とか、花びらの束を作りました。その後は、束を花の形にまとめ、用意していただいた葉やリボンを加えると、徐々にヤエツバキの花に見えてきました。この花にピンを付けてコサージュにするのも可能ですが、この日はヒノキの間伐材で作られた台を用意していただきました。素敵なインテリアがおよそ1時間半で完成です。

従来は捨てられていたかんなくずが「ひのきシート」となり、「世界に一つだけの花」に生まれ変わりました。

お問合わせ

「ヒノキアート田原屋」(不定休)
TEL 0597・22・0470